
降り注ぐ雨、君を雨宿り。

mck0084

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り注ぐ雨、君を雨宿り。

【Nコード】

N6930A

【作者名】

m c k 0 0 8 4

【あらすじ】

平次と和葉は、幼馴染であるも、心の中ではお互いを大切に想っていた。そしてこれからも一緒にいられると思っていた。しかし、夏も過ぎようとする頃不慮の事故で平次が亡くなってしまい・・・。

第1話：夏の終わり（和葉編）

あれは8月も終わりにさしかかった頃やった。

あたしらはあの日もいつもの様に、一緒にたわいもない話をしながら歩いてた。そして横断歩道を渡り終えようとした時、暴走した車が私めがけて突っ込んできたんや。氣い付いた時には足がすぐんで動かれへんかった。

その時やった。

あたしの背中が何か大きな力で押されて、道路脇の歩道へ突き飛ばされたんや。同時にものすごい音がして振り向くと・・・

その暴走車は横断歩道を過ぎた辺りで急ブレーキをかけて止まっていた。その前には・・・信じられへん光景があった。真っ赤な血でまみれたの幼馴染が倒れてたんやから。

あたしは無我夢中で駆けよった。

持ってたハンカチで必死に出血を押えようしたけど、すぐに赤く染まってとめどなく血が溢れてくるんや。せやけど、あたし一人じゃ何にも出来へんかった。痛々しい幼馴染みを前にしても助けてあげられへんかった。そやから、あたしは精一杯何度も何度もその幼馴染みの名前を呼んだんや。あいつに届くように、ありったけの大きな声で。望みを託して・・・。

せやけど、平次はもう目を覚ますことはなかった。

『平次が亡くなった。』

通夜、葬式に出てもその事実が実感できへんかった。なんであたしが今ここにいるかもよう分からへんくて、頭の中も真っ白で何にも考えられへんかった。そやから参列者が皆号泣する中で、あたし一人泣かへんかった。

これは夢なんやって・・・、悪い夢をみてるんやって思ってた。目が覚めたら、今までと変わらん生活に戻るんやって思ってた。・・・また平次に会えると思ってた。

せやけど、なんぼ日にちが過ぎてても何にも変わらへんかった。平次の家や学校、街へ行つても、会われへんかった。電話かけても通じへんから話す事はおろか、声を聞く事すらもできへん。どんなに平次を探しても会われへんねん。会いとうてたまらんのに会えへん。あのキラキラした顔に会われんねん。

ただ時間がだけが過ぎてしもた。日が経つにつれて、今あることが夢やのーて、現実なんやって実感した。・・・もう平次はいないって事を受け入れなくなかったのかもしれへん。きつと心のどこかで夢であるよう願ってた自分がいたんや。

・・・ほんまに亡くなつてしもたんやね。・・・なんであたしの事がばったりしたん。なんだかんだゆうて平次はあたしの事守ってくれてたけど、
死んでもたら意味ないやん。・・・あんたが生きてへんと、・・・あんたが側におらんとあかんねん。あたし一人になつてまうやん。
・・・それにあたし平次にまだ大事な事言えてへん。

あの日からこらえてたものが一気に溢れた。とめどなく涙が頬をつたって、やり場の無い想いが込み上げてくる。届かへん想いを天に向かつて叫んだ。
もう二度と会われへん、一番大切に大好きな幼馴染に向けて・・・

あの日からすでに一ヶ月、季節は秋に移り変わろうとしていた。

第1話：夏の終わり（和葉編）（後書き）

初めまして、m c k 0 0 8 4と申します。執筆に関しては初心者ですので、よろしくお願い致します。

第1話ではいきなりダークな話ですが、平次がいなくなつた和葉の辛さを少しでも分かつて頂けたらと思います。

また御感想・御意見をいつでもお待ちしております。

第2話：夏の終わり（平次編）

それは何の前触れもなく、ある日突然やってきた。

俺はいつもの様に和葉と一緒に歩いてたんや。そう、いつもと変わらんかったはずやった。

そして横断歩道を渡った時、前を歩いotta和葉に向かって車が猛スピードで突っ込んできたんや。あいつは動かれんでいる。

「あかん、危ない！」

そう思ったら身体が勝手に反応して、和葉の背中を思いっきり押したってた。

・・・そこから俺はどうなったか覚えてへん。

氣いつくと車は横断歩道を過ぎた辺りで止まっとった。

同時に不安に駆られて無意識にあいつの姿を探したら、横断歩道のど真ん中で和葉が座っとった。

「良かった・・・。」

そう思ったのも束の間やった。その和葉に支えられているのは・・・
血まみれの俺やった。

・・・嘘やろ・・・？

俺は訳が分からんようになってもうて、とりあえず和葉とその俺らしきもんになつた。あいつは俺らしきもんから出るとる溢れてくる血を押さえながら、必死にそいつに向かって俺の名を呼んどった。そやから、

「俺はここにおんで。」
って言いながら和葉の前で何度も手を振った。せやけどあいつ、俺に全然気いついてないねん。・・まるで俺の事が全く見えてへんかのようにな。・・。

そしてやつと分かったんや。俺は死んでもうたんやつて。死んだ事に関して全く悔いがないと言ったら嘘になる。せやけど、あいつを守れたことはほんまに良かったと思てる。命に替えても守るって決めてたからな。

自分の通夜・葬式を見てるんは何や変な気持ちやった。おとんにおかんはもちろん、親戚一同や府警関係者、学校の友達、そして和葉・・。仰山集まってくれた・・。ありがとな、みんな。俺の為に・・。

特におとんとおかん、子供の俺の方が先に逝ってしもうて堪忍。
17年間ありがとな。

そして和葉。お前には随分と迷惑かけてもうて・・ほんま悪かったな。そんで、仰山怒らせてしもたし、泣かせてもうた。

おまけに死んでもうて・・。せやけどお前には俺の分まで幸せになつて欲しい。いつも笑顔でいて欲しいんや・・。

せやけどあいつはあれから一か月程過ぎても俺が死んだ事を受け入れてへんようやった。俺の家や学校、街へ行ったり、電話をかけたらしては今だに俺の姿を探してたんや。その度に姿を見せてやりとつて、声を聞かせてあげとつてたまらんかった。せやけどそれは出来へんかった。それからしばらくして俺が死んだって事が実感できるようになったのかもしれへん。その時やった。あいつの叫びが聞こえたんは。今の和葉の気持ちが分かったんは。

「・・・ほんまに亡くなってもたんやね。」

「・・・なんであたしの事がばったりしたん。」

なんだかんだゆうって平次はあたしの事守ってくれてたけど、死んでもたら意味ないやん。

「・・・。」

「・・・あんたが生きてへんと、・・・あんたが側におらんとあかんねん。」

「・・・。」

「・・・それにあたし、まだ大事な事言えてへん。」

「・・・。」

和葉の叫びに何にも返せへん。あいつはあんなに苦しんでしもうてるのに、隣りにいてやる事も、慰める事もできへん。

「俺かて和葉に伝えられへんかった事があんねや。」

せやけどこうなってしまった以上全ての想いを受け止めてあげられへん。ただ和葉を遠くから見守る事しかできへんのや。

和葉を何としても守りたかった、せやけど結局あいつを苦しませて

しもうてる。

ほんま情けないなあ……。今の俺には和葉を幸せにする所か、笑顔を取り戻したる事もできへん。……何にもしてあげれへん、……この手は何の為にあるんやろか……。

愛しい幼馴染みに、気持ちすら届かない事に無力さと自分に対する憤りを感じた。

あの日からすでに一ヶ月、季節は秋に移り変わろうとしていた。

第2話：夏の終わり（平次編）（後書き）

第1話は和葉目線でしたが、第2話は平次目線です。話の時間は同時期のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6930a/>

降り注ぐ雨、君を雨宿り。

2010年10月10日05時17分発行